

2 - 2 . 海岸の歴史

丹後沿岸には、海岸が舞台となった史実・伝説・民話などが無数にある。このことから、海と陸との接点である「海岸」が、そこに住む人にとっていかに重要であり、生活に密着してきたものであったかが伺える。

ここで全てを紹介することは困難であるが、広く知られるものや、興味深いものなどについていくつかを挙げ、前項で整理した海岸の現況と併せ、今後の海岸保全の指標としたい。

日本最古の舟着場（舞鶴市）

舞鶴湾の東北端近くに長さ約 300mの砂嘴があり、これに囲まれた小さな入り江は浦入と呼ばれている。氷河期の後、縄文前期に海面が最も上昇した現象を縄文海進と呼んでいるが、



遺跡調査の結果、この砂嘴は縄文海進によって形成されたことが明らかになった。砂嘴の起点近くからは、杭や礎とともに、海進で埋もれた丸木舟が見つかり、日本最古の舟着場とされた。この丸木舟は杉をくり貫いて造ったもので、推定全長 10m（残存長 4.6m）、幅約 1m、舟底の厚さ 7cm である。年代測定の結果、約 5,300 年前のものとされた。舟の大きさから見て、漁業のためだけでなく、交易にも利用したのと思われる。浦入の人々は、ここに住み始めた縄文早期後半から、ここを定住の場だけでなく、季節生活の場、漁労活動の

基地、風待ちなど、多目的に利用していたものと思われる。

現代の浦入は、数戸の民家と別荘及び湾内定期航路の小さな船着場があるのみの小村であった。近隣が火力発電所の建設用地となったため、小村さえ消えたが、このような古代ロマンが隠されていたのである。日本最古の舟着場があった浦入の現代の船着場も、定期航路の乗船客減少と発電所工事に伴い廃止された。

（出典：京都府埋蔵文化財調査研究センター資料 ほか）



天橋立と丹後の国の歴史（宮津市ほか）

天橋立は、日本三景の一つとして有名であり、自体は約 2.5km の砂嘴であるが、この約半



分は、弥生時代に出来たと考えられる。古代人には、大変不思議な地形であったに違いなく、イザナギノミコトが、天からイザナミノミコトに会いに来るための梯子が、倒れて天橋立が出来た...なる「神話」も、この神秘的な地形から生まれたのではないかと推測される。

前出「浦入の砂嘴」は、縄文海進で出来たとしたが、天橋立も同様であり、海面が縄文海進により、上昇した状態で湾外から波が入り、発生した沿岸流で、宮津市北部 3 河川から出てきた砂が湾奥へ運ばれた。その後、海面低下と引続きの漂砂で、江尻の平地や天

橋立が形成されたと見られる。ただ、現在の天橋立が「完成」するには、発芽以来 3,500 年かかったと見られ、雪舟、益軒、広重らが、各時代に描き編集した絵や図では、少しづつ成長する天橋立の様子が分かる。



竹野川河口潟湖推定図

丹後の国は、奈良時代に丹波の国から分離してできた。丹後の国の国府は、天橋立の府中であつたようだが、古くは、丹後半島北部が国の中心であつたと推定され、それを裏付けるように、付近には大きな古墳があり、また、沢山の出土品が出ている。当時は、福田川や竹野川などの河口には、潟湖があり、港になっていたと見られるが、これらが、河口閉塞により港としての機能を失い、交易が出来なくなり、港で繁栄していた豪族などが、新しい港を求めて天橋立周辺に移り、「遷都」されたものと考えられる。

時代が変わって、現在の天橋立は、供給土砂の減少や阻害などにより、サンドバイパスなど諸対策が施されているが、単に美しい風景であるだけでなく、このような歴史があることを踏まえ次世代に継承していく必要がある。

(出典：歴史の中の天橋立とその形成の過程 / 岩垣雄一 ほか)

オシマ参り (若狭湾岸一帯)

若狭湾に浮かぶ冠島は、別名雄島、大島と呼ばれ、隣の沓島は、雌島、小島と呼ばれている。冠島は、古くから漁師等に避難場所として使われたところで、避難小屋が設けられており、天候急変や船の故障時に備え、遭難してもここで食事をし、救助を待てるように、米・漬物・酒等が保管されていた。

この島は、また若狭湾沿岸に広く信仰を集めている。島には、老人嶋神社・船玉神社・瀬ノ宮神社の3神社があり、沿岸各地からの参拝者は、供物を下げて、まず老人嶋神社、次に船玉神社、そして瀬ノ宮神社に参拝し、海上安全、大漁祈願を祈って来た。

この信仰は、現在も続いているが、避難小屋は既になく、京都府の島であり、特別天然記念物であるオオミズナギドリの繁殖地であるため、一般者のこの島への立ち入りは禁止されている。

(出典：舞鶴市史 ほか)



久美浜と浜詰の村境 (網野町・久美浜町)

今でこそ海岸漂着物は、「海岸ゴミ」であり、単なる邪魔者、厄介者とされているが、昔は、「寄りもの」等と呼ばれ、重要な生活の糧となっていた。鹿児島県トカラ列島の小宝島では、木材が皆無であるため、昭和30年代まで学校校舎を含む全ての家屋が「寄木(漂着した木材)」のみで建造されていた。寄木は貴重品であり、管理は全て島総代に委ねられていた。また、それら漂着物の所有権を巡って、様々な取決めなどができた。石川県能登の西海岸では、江



戸中期以降、新たに海岸に住むことを禁じた規約さえ作られた。これは、当然のことながら、分け前口数の増加を防ぐためである。

このように海岸漂着物は、価値あるものであったが、その取締りが厳重で、いちいち届出をしなければならないことから、自村の浜を狭くした話が丹後に残っている。

現在の京丹後市久美浜町から同網野町に至る約 6 km の砂浜「久美の浜」は、昔は、特に漂着物の多い地域で、その海岸の箱石には、海から拾ってきた千両箱で、長者になった者が住んでいたという伝説もあった。久美浜とその東の浜詰との間の長い砂浜における村境、現在の町境は、ずっと東に寄っているが、これは浜詰の人が、漂着物の届出のわずらわしさから、久美浜との境を決めるとき、それぞれ代表者が村の中央から歩き出して行き逢ったところを境にする約束で歩きだしたのであるが、浜詰の代表は、わざとゆるゆる歩いて、境が自



村に近くなるようにしたということである。行逢う地を境にした話は数多いが、漂着物の届出がうるさいので境を決めたこの話は、それほど漂着物が多く、その取締りも厳しかったことを物語るものである。

現在の京丹後市久美浜町と同網野町の境界を決めた要因が「海岸ゴミ」であったということである。

(出典：日本残酷物語第 1 集 / 宮本常一他編 ほか)

浦嶋子 (浦島太郎) の伝説 (伊根町)

...「水の江の浦嶋子」は、現在の伊根町在、漁師の長であった。ある時、3 日 3 晩獲物が無かったが、突然五色の亀を釣り上げるや、忽ち眠気に襲われ目覚めると、舟に美しい女性がいた。神女と思しきその女性に同行を求められ、遙か彼方の大きな島に到着し、大御殿に迎えられ、姫の家族に歓待された。この姫「^{かめひめ}亀比売」とは結ばれることになっていたようで、



この^{とこよ}仙都で 3 年暮らした。故郷や両親が恋しくなり、一時帰郷を決意、嘆く姫から^{たましくげ}玉匣を渡され、「仙界に戻るつもりなら開けてはいけない」と告げられる。戻った土地は、人も物も遷り変わり、郷の人に浦嶋子のことを尋ねれば、海に遊びに出かけ三百余年が経つとのこと。仙界では速度百倍で時が過ぎていたのであった。親しい人に逢えぬ悲しさから、玉匣を撫でて姫を想って、玉匣を開けたとき、飛び出したものは、自分の魂で

あった...

丹波の国司を勤めた漢文学者の伊預部馬飼^{いよべのうまかい}が、書き残したこの物語は、後世「浦島太郎」と名付けられ、亀を助けて竜宮城へ行ったと語られた。丹後の海岸から生まれたこの話は、まず知らない人はいないほど有名である。現在、伊根町本庄に宇良神社（浦嶋神社）が建てられ、浦嶋子が祀られており、「亀を助けた浜」は、浦島漁港海岸として、離岸堤等の海岸保全施設が設置されている。

（出典：丹後半島歴史紀行 / 瀧音能之・三船隆之 ほか）



新井崎^{にいざき}の徐福（伊根町）

海岸漂着物のことを先に紹介したが、海岸に漂着した「人」の伝説も大変多い。

秦の始皇帝の家臣徐福は、東方の国にあるといわれる「不老不死の薬を探し求めよ。」と主人から命ぜられ、航海に出て、現在の伊根町新井の海岸に辿り着いた。薬を求めて探し歩いたが、なかなか見つけることが出来ず、長居することになったが、ようやくその薬と思しきよもぎと菖蒲とクコを見つけた。しかし、結局海が荒れるやら何やらで、国には帰らず、ここで成仏するに至った。文明の高い中国からの来訪者であり、産業振興に尽力したため、大変慕われ、新井崎神社として崇められたということである。当初は、徐福が流れ着いた海縁りに神社はあったが、この神社の沖を帆掛け船が航行すると、帆が折れてしまうことが続き、その気高さも崇めるため、後に神社は高台に移転された。



このような伝説が生まれる背景には、やはり丹後の地理的条件がある。昔から、対馬海流に乗って東に流れた物や人が、若狭湾の環流により丹後半島に漂着することが多かったことがその根元といえ、同様の地理的条件下にある紀伊半島等にも同じ徐福の伝説がある。

現在は、伝説になるような人が流れ着くことはまず考えにくいですが、重油や投棄物といった余計な物も含め様々なものが、海流に乗って丹後に漂着する現象は、大昔から変わらず、有り難いかどうかは別として、これは丹後沿岸の伝統といえるであろう。

（出典：京都の伝説 丹後を歩く / 福田晃・真下厚 ほか）